●事例紹介●

地域の「元気」を創造する 徳島大学の生涯学習

田中 俊夫（徳島大学大学開放実践センター 教授）
大橋 眞（徳島大学総合科学部 教授）

一 徳島大学の生涯学習

学生教育は大学にとって欠くべからざる重要な機能であるが、地域の住民を対象として大学の持つ教育資源を開放し、生涯学習の推進に資することも、今日強く大学に求められているところである。

徳島大学では昭和六一年の教育学部改組に伴い、学生教育を担う総合科学部と生涯学習を担当する大学開放実践センターに分割された。以来、二〇年間に渡って大学開放実践センターは地域の生涯学習の拠点としての役割を果たしてきた。

平成一九年度の公開講座開講数は一二七講座に上り、これは国立大学法人八七大学の中でナンバー1の実績である。過去には、センターの活動が認められて「社会貢献」分野で学位授与機構からＡＡＡ、朝日新聞社大学評価ランキングＡと高い評価を受けている。平成一九年度の受講者数は延べ二六二〇人となっており、これは開設当時の四倍、一〇年前の二倍と増加傾向が続いている。年齢層を見れば一四歳から八八歳までが世代を超えてセンターに集っているのである。

講座数や受講者数といった数値的な実績だけではなく、センターの公開講座の特色は多種・多岐に渡る講座群にある。例えば「情報・技術」分野ではワードの初歩クラスからユビキタスやシェルプログラミングをテーマにしたものやデータ解析まで、語学では英語はもちろん、仏独中韓と五ヶ国語をカバーしている。コーラスや書道の講座は二〇年もの長い歴史を持ち、コンテストにおいても数々の受賞実績を積み重ねてきた。また、医学部・歯学部を有することから医師による健康をテーマにした講座も多数開講され、多くの受講者を集めている。

趣味や教養だけでなく実務に直接役立つものやキャリアアップ、資格支援を目指した講座も設定されている。具体的に上げれば、看護ＯＪＴ（職場内訓練）リーダーの認定講座、教員を対象としたＩＣＴ（情報通信技術）を授業に活用するための教育工学、小学校教員のための英語講座やＴＯＥＩＣテスト対策、さらにはベンチャービジネス入門や採農希望者を対象とした市民ファーマー養成講座などが開設されている。

本稿では、徳島大学ならではのユニークな取り組みとして、マラソンと遍路をテーマとした公開講座について紹介する。また、学生教育の中に社会人を取り込み、学生と社会人が協同して授業の企画から取り組んでいく「共創型学習」という新たな学生教育、生涯学習の試みを概説する。

二　徳島大学ならではのユニークな公開講座

「健康」は生涯学習の中でも主要テーマの一つ。地域の中では健康をテーマとした様々な生涯学習プログラムが開催されている。大学だからこそできる、と同時に他大学にはないユニークな取り組みが「ホノルルマラソンを走ろう」そして「空海と歩く」である。いずれもジョギングやウォーキングといった健康づくりに役立つ身体活動を題材に、ホノルルマラソン完走や歩き遍路八十八カ所結願（けちがん）というビックチャレンジを目標に掲げ、目標達成のためのトレーニングと座学による学習活動を組み合わせたプログラムだ。マラソンも遍路も個人又は小グループで取り組んでいくことが一般的であり、そのため、ある程度の体力や経験、自信を有する人でなければ「始めてみる」ことさえ考えてもいなかったという人が多い。一人ではとても実現不能と諦めがちな大きな挑戦も、提供される学習プログラムに集団で取り組むことによって達成可能な感覚が持てるものである。

プログラムの背景には人間の行動強化を実現する行動理論があり、目標達成までの過程にセルフモニタリングや自己報酬などの多くの技法を取り入れ、セルフエフィカシー（自己効力感）を高めることにより、より多くの受講者を目標達成に導くことに成功してきた。

三　初心者を対象とした「ホノルルマラソンを走ろう」

フルマラソン初心者を対象に一〇〇ｍのジョギングから始めて半年後にホノルルマラソン（四二・一九五㎞）完走を目指すという「ホノルルマラソンを走ろう」講座。平成一四年に開講したこの講座は「自分がホノルルマラソンのランナーの一人になる」という市民のチャレンジ心を刺激してきた。毎年八〇名以上の新規受講者を集め、二年目以上の継続受講者を合わせると、本年の受講者数は三六七名と大きな集団となった。本年度の開講式は五月一〇日（土）に本学創成学習スタジオに約三〇〇名を集め、青野学長の開講メッセージとともに始まった。これから一二月一四日（日）のホノルルマラソンに向けた新規受講者約一〇〇名の七ヶ月間に渡る挑戦が始まるのである。

受講者の平均年齢は五一歳、中高齢者、そして女性が多いことが特徴である。女性は約三分の二を占め、ジョギング経験がまったくない人も半数を超える。そんな初心者が、トレーニング学やスポーツ医学、栄養学などを学びながら、一〇〇ｍから始めて徐々に走る距離を伸ばし、初マラソンにチャレンジするわけである。年齢的、体力的な問題から順風満帆には行かない人のほうが多い。しかし、ビックチャレンジを目標に掲げ、それに向かって少しずつ近づいていく実感が学習行動を継続させるのである。

六年間で延べ三八九人がホノルルのゴールゲートをくぐり抜け、そのうち初マラソン完走は三〇〇人に達した。最高齢は八〇歳にして八時間をかけて初マラソンを完走した男性である。これら受講者の挑戦は様々な地元メディアに何度も取り上げられ、地域に明るい話題を提供し、人の持つ可能性の素晴らしさを伝えることができたはずである。思ってもみなかった「フルマラソン完走」を実現させた受講者はその感動を職場や地域で伝え、それがまた新たな挑戦者や運動の実践者を作り出してきた。

受講者は「徳島大学ジョガーズ・パラダイス（ＴＪＰ）」というクラブ組織を作り、合同練習会や大会参加、阿波踊り参加やスポーツ・懇親活動の開催などを行っており、多くの受講者の余暇活動の基盤ともなっている。

ホノルルマラソンスタート前

ホノルルマラソンのゴール風景

「健康」「生きがい」「仲間づくり」の3 in 1を実現するこの講座はこれからも徳島を元気にし、それを全国に向けて発信していくはずである。

四　歩き遍路の世界を身近なものにした「空海と歩く」

四国八十八ヵ所をめぐるお遍路さんは「お四国さん」と呼ばれ、親しまれてきた。本来、遍路は修行や祈祷の厳しい旅であり、白衣は死装束、金剛杖は行き倒れた時の墓標となるものであった。現代ではバスやマイカーによる参拝が中心となり、遍路は比較的手軽なものとなって来た。一方では、今では少数派となったこの一二〇〇キロにも及ぶ八十八ヵ所を歩く遍路が究極のスローライフや自分探しの旅、癒しの旅として静かなブームを呼んでいる。しかし、歩き遍路は「時間」と「お金」と「健康」がなければ実現できないといわれ、取り組める人自体がかなり限定される。また、思い立ったら誰にでもできるというものではなく、特に高齢者や女性には「安全」という課題が大きな障壁となってくる。「それでもやってみたい」という願いに応えた公開講座が平成一六年度に開講した「空海と歩く」である。

「空海と歩く」では、遍路の歴史や民族学を学び、住職の講話を聞き、筋力トレーニングなどのトレーニング方法を実習する。また、実際に二〇㎞という長距離や山道も歩いて遍路に備えるだけでなく、歩数計を付けて日々の歩数を記録する。日常生活における運動習慣の形成を図り、基礎体力を培うことが目的である。さらに運動継続のための動機付けツールとして、歩数を距離換算して紙上遍路を回る「バーチャル遍路88」を実施している。その一形態として、携帯電話とブログを利用してHP上の四国地図を各自のこまが移動する「ユビキタス遍路」を開発し、これが第七回インターネット活用教育実践コンクール（文部科学省）において文部科学大臣賞を受賞した。

基礎学習とトレーニングを終えると半年に一度、一週間の遍路の旅に出かけるのである。四～五〇名にも及ぶ遍路装束のグループは歩き遍路としては異例の規模であり、安全性や効率の確保など容易にはいかない課題も山積していたが、県ウォーキング協会の協力なども得て大過なく進めて来れた。

平成一七年三月に始まった遍路の旅も六回を数え、四八日間、一二〇〇㎞を歩き、平成二〇年三月に八八ヵ寺目の大窪寺に到達し、結願の時を迎えることができた。平均年齢六五歳の受講者が一日平均二五㎞、四万歩を歩ききることができたのである。この講座もシニアの学びを紹介する様々な雑誌や新聞に取り上げられ、本年度から再開する二回目の遍路講座に県外から多くの問合せをいただいている。

高知の海岸を歩く

五　社会人と学生が作る「共創型学習」

今日の学生教育では、これまでにない新しい視点から豊かな発想が出来る人材育成が求められており、社会に目を

向けさせるための教育が重要な課題になっている。徳島大学では、近年、様々な教育改革を行ってきたが、その一つが平成一七年度より設置した創成学習科目であり、これは体験を通じた相互学習を行いながら学びを深める形式の授業科目であった。この創成学習科目において、試行的に一般社会人のボランティアに授業の協力をお願いして相互学習型の授業を行ったところ、社会人ボランティアの活用が学習方法の開発の上で様々な発展性があることがわかった。また、学生の自己評価や授業評価において、極めて高い評価が得られた。

そこで、平成二〇年度より社会性形成科目群を新たに設置し、創成学習科目から発展させた共創型学習科目を充実させることになった。この科目のなかで特に重点的に取り組んできたのが、学生と社会人参加による授業企画ワーキンググループを設置して、教員以外の視点から授業の企画を行う試みである。このワーキンググループが関わる授業として「名著講読」、「地域社会からのメッセージ」、「学生と社会人のための授業企画ゼミ」を新たに設置した。また、これらの授業に参加して、学生の社会性形成のために教員と協力しながら授業に関わっていただく「大学教育ボランティア」を一般社会人から公募した。その結果、予定を上回る数の応募者があり、応募者の殆どが大学教育に関わることに対して極めて強い意欲を持ち合わせていることがわかった。これまで行ってきた実際の授業でも、かなり的確な方向性で積極的な意見が社会人から数多く出されている。学生にとってみると、これまでは学校という外界から隔絶された社会で、教員から一方的に教わる形式の授業を通じて学ぶことが多かったと思われるが、これらの授業を受講してから全く異なった学びの環境にさらされることになる。このような一般社会人がボランティアとして参加する授業では、教員よりも一般社会人から学生に対して忌憚のない様々な意見が飛び出してくる。そのため授業開始当初は、学生の戸惑う姿も散見された。また、このような忌憚のない意見は、時として教員にも向けられることもある。当初はこのような戸惑いが学生や教員にあったとしても、やがてこれを乗り越える時に自らの成長を感じるはずである。また、ボランティアとして参加した社会人自身も新たな学びを得ると思われる。

共創型学習科目は、学生の社会性形成としてだけではなく、担当する教員自身も学びを深める場としての機能がある点が重要である。この授業を担当する教員は、その分野を専門としない教員が担当する事を原則としている。その

ために、担当する教員は、授業を円滑に進めるための幅広い教養を様々な局面で身につけることに結果的につながってゆく。さらに、一般の教養科目においても、大学教育ボランティアの社会人にコメンテーターとして参加してもらい、教員と社会人による討論を授業の一部に取り入れることにより、共創型学習科目のように学生からの意見を引き出す試みも始まっている。このように、一般社会人を大学の授業で活用することは、様々な局面で大学の教養教育の改革を進めるきっかけになると考えられる。

学生と社会人による授業企画ワーキング